

プーシキン『西スラヴ人の歌』における セルビア民謡の翻訳2篇について (1)

伊 東 一 郎

1. 初めに

プーシキンの16の詩編からなる連作詩『西スラヴ人の歌』«*Песни западных славян*» (1833-35) はプーシキンがセルビア・フォークロアに取材した特異な作品群である。しかしこの作品はわが国の研究者の関心をこれまで引いてきたとは言いがたい。戦前にはこの連作詩から6篇が翻訳されているが ([プーシキン 1926;1937])、戦後においては河出書房新社版の邦訳『プーシキン全集』(全6巻 1972-74年)にもこの連作詩からは一篇も翻訳が収録されていないし、その後刊行された『プーシキン詩集 本邦初訳』(草鹿外吉他訳 青磁社1990年)にも訳がない。筆者の知る限り、第10篇「夜鶯」に金子幸彦氏の訳があるのと、第15編については栗原氏の論考[栗原 1987]の中に第15篇「ヤヌィン王子」の要約があるのみである。また第11篇「カラゲオルギイの歌」については、『カラマーズフの兄弟』との関連で江川卓が触れているが[江川 1991: 25-31]、それぞれ断片的な訳と紹介にとどまっている。日本プーシキン学会の会報『日本プーシキン学会会報』(1988-1998)にもこの作品を扱った論考はなく、さらに佐藤繁好氏の編による綿密な『日本のプーシキン書誌 (翻訳・紹介・研究文献目録)』(1999)にもプーシキンのこの作品全体の日本人による邦語の研究はない。後に紹介するようにセルビア・フォークロアの専門家でもあるスラヴィスト栗原成郎氏によるロシア語の論考[Курихара 1986]があるのみである。

というのもこの連作詩は基本的にメリメのフランス語の作品集『グズラ、あるいはダルマチア、ボスニア、クロアチア、ヘルツェゴヴィナにて採集されたイリリア叙情詩選』*La Guzla, ou Choix de Poésies Illyriques recueillies dans la Dalmatie, la Bosnie, la Croatie et l'Herzégovine*. (1827) からの翻訳11篇とヴーク・カラジッチの『セルビア民謡集』*Српски народне пјесме* (第2版 1824) に収められたセルビア語テキストからの翻訳2篇、さらにプーシキン自身の創作詩3篇によって構成されているからであり、そのため全体としてはプーシキンのオリジナリティの低い、つまりプーシキン研究の対象としては価値が低い作品とみなされたためであろう。しかしこの作品は出自の異なる16篇の詩の全体に韻律論的に共通の2つの形式を一貫させることで、プーシキン自身の構成になるロシア語の連作詩としての統一性を持っており、この点からもプーシキンのロシア語作品として独自の意義を持っている、ということができる。

プーシキンによる『西スラヴ人の歌』の創作はいくつかの問題を提起する。それはメリメの『グズラ』とプーシキンの『西スラヴ人の歌』との比較文学的な関係の問題⁽¹⁾、カラジッチの民謡集のセルビア語テキストからの翻訳の問題、プーシキン自身の創作の典拠の問題、連作詩全体を統一する詩篇全体に特有の独特な韻律の問題⁽²⁾の4つに分けられるだろう。本稿は筆者の『西スラヴ人の歌』研究の一端をなすもので、このうち第2の問題、すなわちプーシキンによるセルビア民謡の直接訳を検討するものである。

2. メリメ『グズラ』執筆の経緯

『西スラヴ人の歌』の中心をなすのはメリメの『グズラ』(1827)からの翻訳であり、この両者の比較文学的關係については稿を改める予定だが、最初にこの『グズラ』執筆の経緯を簡単に記しておこう。プロスペール・メリメ(1803-1870)はこの作品を真正の南スラヴ・フォークロアの翻訳集と称して出版したのだが、実際にはメリメ自身の創作であった。そもそも『グズラ』"La Guzla"という題名そのものがセルビア叙事詩の吟唱に使われる弓奏楽器グスレ gusle を連想させながら[伊東 1995]、実は自分の文壇へのデビュー作である前作『クララ・ガズルの劇』"Théâtre de Clara Gazul" (1825)に登場させた架空のスペイン女優の名 Gazul のアナグラムに他ならない[種村 1985]。このことはプーシキンも気づいていて、『西スラヴ人の歌』の序文で、この作品集に収められた作品がどのような典拠に基づいて書かれたか、メリメに聞いてくれるようにメリメと親交のあった友人のソボレフスキーに執筆の経緯を問い合わせてもらっている。この問い合わせに対してソボレフスキーがメリメから受け取った返事をプーシキンは『西スラヴ人の歌』の序文に掲載している。この返事そのものもまた文学的虚構であることをプーシキン自身もおそらく見抜いていたが、逆にそのことにプーシキンは面白みを覚えていたのだろう。プーシキン自身「翻訳」と称した偽作を晩年にいくつか書いている。例えば「小悲劇」の一つ『吝嗇な騎士』(1830)は「シェンストン作『吝嗇な騎士』からの情景」とされているが、シェンストンにはそのような作品はなく、プーシキンの創作とみなされている⁽³⁾。またプーシキンがキレエフスキーに自分の収集した民謡の中に自作を混ぜて渡し「どれが民衆の歌った歌でどれが僕自身が作ったものか当ててごらん」と言ったのは有名な話である。

3. プーシキンの『西スラヴ人の歌』執筆の経緯

現代のスラヴ文献学では「西スラヴ人」という術語は、ポーランド語、チェコ語、スロヴァキア語などの西スラヴ諸語を母語とする民族をさすが、プーシキンはメリメの作品集を基にこれらの詩篇を書いたわけだから、その意味では『南スラヴ人の歌』とすべきものである。民族叙事詩というジャンルが称揚された18世紀末から19世紀のロマン主義の時代に、『オシアン』『イーゴリ軍記』のような叙事詩が発見・発掘されてきたことに加えて、プーシキンの同時代にはカラ

ジッチの『セルビア民謡集』の出版が、ゲーテなどの賛辞を得て注目され、スラヴ叙事詩見直しの機運が高まっていた。プーシキンがこのような作品に手を染めた動機の一つはそこにあると考えられる。プーシキンは1828年頃から1834年にかけて上述のメリメの『グズラ』の翻訳を手がけていたが、草稿が殆ど残っておらず、『西スラヴ人の歌』の制作年代は今に至るまで論争をよんでいる〔Фомичев 1983〕。

4. 『西スラヴ人の歌』の構成

『西スラヴ人の歌』は16の詩編から構成されている。その内容は次の通りである。タイトルの後の符号は M. がメリメからの翻訳、K. がカラジッチの民謡集からの翻訳、P. がプーシキンの創作であることを示す。翻訳の場合には記号の後に原詩の表題を挙げてある。(4脚ホレイ)と記してある4篇の作品以外は、プーシキンがこの連作詩で用いた独特の叙事詩的韻律を用いて書かれている。

1. 「王の幻視」 Виденье короля [M. La Vision de Thomas II, roi de Bosnie]
2. 「ヤンコ・マルナヴィッチ」 Янко Маркович [M. La flamme de Perrussich]
3. 「ヴェリカ・ゼニツァの戦い」 Битва в Великой Зенице [M. Le Combat de Zenitza-Velika]
4. 「フェオードルとエレーナ」 Феодор и Елена [M. La Belle Héléne]
5. 「ヴェネツィアのヴラフ」 Влах в Венеции [M. La Morlaque à Venise]
6. 「義賊フリズニチ」 Разбойник Хризнич [M. Les Braves Heiduques]
7. 「イアキンフ・マグラノヴィッチの葬送歌」
Похоронная песня Иакинфа Магланович [M. Chant de mort] (4脚ホレイ)
8. 「マルコ・ヤクボヴィッチ」 Марко Якубович [M. Constantin Yacoubovich]
9. 「ボナパルトとモンテネグロ人たち」
Бонапарт и черногорцы [M. Les Monténégrins] (4脚ホレイ)
10. 「夜鶯」 Соловей [K. Три највеће туге] (4脚ホレイ)
11. 「カラゲオルギイの歌」 Песня о Георгии черном [P.]
12. 「司令官ミロシュ」 Воевода Милош [P.]
13. 「吸血鬼」 Упырь [M. Jeannot.]
14. 「妹と兄弟」 Сестра и братья [K. Бог никому дужан не остаје]
15. 「ヤヌィシ王子」 Яныш Королевич [P.]
16. 「馬」 Конь [M. Le Cheval de Thomas II] (4脚ホレイ)

このように『西スラヴ人の歌』のうちの11編(1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 13, 16)はメリメのフラ

ンス語作品集『グズラ』からの翻訳であり、2編（10, 14）はヴーク・カラジッチの編集したセルビア語の『セルビア民謡集』からの翻訳であり、3編（11, 12, 15）が恐らくプーシキン自身の作と考えられている。

5. プーシキンとカラジッチ

以上のように本連作詩に含まれたセルビア民謡の翻訳は2篇である。ひとつは第10篇「夜鶯」、もうひとつは第14篇「兄と妹」である。この2編はいずれもヴーク・カラジッチの編による『セルビア民謡集』に含まれている。ではプーシキンはどのようにしてこの民謡集を知り、プーシキンとカラジッチはその時代にあってどのような関係にあったのか。

カラジッチの略歴をそのロシア訪問を中心に略述する。ヴーク・ステファノヴィッチ・カラジッチは西セルビア、ローズニツァ近郊の小村トゥルシッチに1787年10月26日に生まれた。プーシキン（1799-1836）の12歳年上ということになり、ジュコフスキー（1783-1852）の世代の文化人ということになる。近くのトロノシャ修道院で読み書きを学び、遍歴の吟遊詩人グスラールの英雄叙事詩に深く影響を受けた。

1804年にセルビアの対トルコ蜂起が起き、翌1805年にカラジッチは当時ハンガリー領だったスレムスキ・カルロフツィへ逃れ、以来転変流浪の人生を送ることとなる。1813年にトルコ軍によってセルビアが再び占領されると、カラジッチはドナウ河を渡ってオーストリア領に逃れ、ウィーンに出た。そこでスロヴェニアの学者イェルネイ・コピタル *Jernej Kopitar*（1780-1844）と会い、セルビア民謡の採録をするようすすめられ、1814年に『セルビア民謡集』第1巻を、1815年に第2巻を、1823年にはライブツィヒで第3巻を出版する。1833年には再びウィーンで第4巻を出版した。このセルビア民謡集はロマン主義全盛のヨーロッパに歓迎され、ヤコブ・グリムはこの民謡集から多くの翻訳を手がけている。

カラジッチは1817年にウィーンでオーストリア女性アンナ・クラウスと結婚し、財政的窮乏を打開する目的で1818年出版の『セルビア語辞典』30部を手同年12月にペテルブルグに向かった。コピタルがアレンジしたペテルブルグへの招待を受けてペテルブルグのロシア聖書協会から新約聖書の現代セルビア語訳の出版契約を結ぶことと、ロシア政府から年金をもらうことが目的であった。1818年の12月初めにカラジッチは出発し、クラクフ、ワルシャワを経由してペテルブルグに向かった。ワルシャワではペテルブルグへ入る許可を待ちながらロシア語を勉強し、カラムジンの『ロシア帝国史』を読んだ。1819年2月末にカラジッチはペテルブルグに到着した。

ペテルブルグでは至るところでカラジッチは歓待されたが、「一文無しだったために危うく飢え死にするとところだった」とコピタルへの手紙に書いている。しかし持参した自分の『セルビア語辞典』30部はまもなく売り切れた。『300部持ってくればよかった』とコピタルへの手紙にカラジッチは書いている。そしてロシアではそれに対する4つの書評が現われた。この際カラジッチ

はカラムジン、ジュコフスキー、シシコフ、ルミャンツェフらに会っている。しかしカラジッチはシシコフから期待した財政的援助の約束を取り付けることはできず、プーシキンとも会わなかった。この頃プーシキンは自作の詩「村」が皇帝の怒りをかい、翌1820年から24年まで南ロシア、カフカース、クリミア、モルダヴィアをめぐる南方への追放時代を迎えるのである。プーシキンは1824年に、セルビア蜂起の後亡命して来たセルビア人とキシニョフで知り合い、セルビア・フォークロアへの関心をこの頃から持つに至る。カラジッチの『セルビア民謡集』は彼の訪露の前に既に最初の2巻が出版され、ドイツ・オーストリアで既によく知られていた[Смирнов 1987:12-13]。プーシキンの蔵書の中にはカラジッチの『セルビア民謡集』(第2版、1824)と『セルビア語辞典』があったことが知られているが、彼が前者を入手するのはいわゆる南方旅行からの帰郷後のことと考えられるのである。こうしてロシアにおけるカラジッチとプーシキンの出会いは残念ながら実現しなかった。¹⁾

6. 『西スラヴ人の歌』第10篇「夜鶯」Соловейとそのセルビア民謡の原詩

6a カラジッチの民謡集におけるセルビア語テキスト

プーシキンがこの翻訳に用いたカラジッチの民謡集のセルビア語のテキストは次の通りである。

Три највеће туге	「3つの大きな悲しみ」
Славуј птица мала сваком покој дала,	小さな鳥の夜鶯は皆に憩いを与えた
А мени јунаку три туге задала:	だが若者の私には三つの悲しみを与えたのだ—
Прва ми је туга на срдашцу моме,	私の心にかかる最初の悲しみは
Што ме није мајка оженила млада;	母が若い私を結婚させてくれなかったこと
Друга ми је туга на срдашцу моме,	私の心にかかる二つ目の悲しみは
Што мој вранац коњиц пода мном не игра;	私の黒馬が私を乗せてもはしゃがないこと
Трећа ми је туга, ах! на срцу моме,	ああ! 私の心にかかる三番目の悲しみは
Што се моја драга на ме расрдила.—	私の恋人が私に腹を立てたこと
Копајте ми раку у пољу широку,	広い野原に私のために穴を掘ってくれ、
10 Два копља широку, четири дугачку;	二槍の巾、四槍の長さの穴を
Више моје главе ружу усадите,	私の頭の上には薔薇を植えてくれ
Сниже моји ногу воду изведите:	私の足下には水をひいてくれ
Које младо прође, нек се ружом кити,	若者が通る時には薔薇で飾らせ
Које л' старо прође, нека жеђу гаси.	老人が通る時には渴きを癒さそう

この民謡は『セルビア民謡集』第1巻に収められており (No.542)、原題はここに示したように「3つの大きな悲しみ」« Три највеће туге »。プーシキンの蔵書の中にあったカラジッチの『セルビア民謡集』は既に述べたように1824年出版の第2版だったが、この民謡については初版は2版と表記が異なる。初版ではこの民謡の冒頭は6音節ごとに改行されて次のように表記されている。

Славуј птица мала
Сваком покој дала,

本稿に収録したカラジッチの民謡集からのテキストは1824年出版の第2版を基にしているが、プーシキンの原稿の中にこのカラジッチの民謡集からの原詩の冒頭4行を書き写したものがあり、それは第2版の表記と同じく1行12音節の形式を取っている。

ところでカラジッチの原注によれば別の歌い手は最初の二行を次のように歌った—

Мрак на земљу паде, сваком покој даде, 闇が地上に舞い降りすべてに憩いを与えた
А мени јунаку три туге зададе. だが若者の私には三つの悲しみを与えたのだ

このヴァリエーションから判断すると、「夜鶯」は必ずしもこの歌の必須のモチーフではないらしい。しかしプーシキンがこの歌を翻訳の対象に選んだ一因は、この歌がまさにロシアの*соловей*に対応する*славуј*で始まることにあったのだろう。

シレベルによれば、このセルビア民謡は古くから多くのヴァリエーションによってクロアチアにも知られており、クハチはダルマチア地方でこの民謡のヴァリエーションの歌詞で歌われていた5つの民謡の旋律を採録している [Šrepel 1899:125; Kuhać 1878:41-45]。

訳注 (数字は行数)

- 1 славуј: 「夜鶯」。ロシア語の *соловей* の対応形。ドイツ語 *Nachtgall*、英語 *nightingale*。一般にノゴマ属 (*Luscinia*) の小鳥の総称。セルビア語の *славуј* はふつう *Luscinia megarhynchos* (サヨナキドリ) をさす ([藤巻 2008: 92-93])。
- 3 срдашце=срце
- 10 この墓穴の寸法についての記述をプーシキンはその翻訳では省略している。

6b 『西スラヴ人の歌』第10篇「夜鶯」のテキスト

このセルビア民謡をプーシキンは『西スラヴ人の歌』第10篇「夜鶯」« Соловей » で次のように訳した。

Соловей	「夜鶯」
Соловей мой, соловейко,	私の夜鶯よ、夜鶯よ
Птица малая лесная!	小さな森の鳥よ!
У тебя ль у малой птицы,	小さな鳥のお前には
Незаменные три песни,	変わらぬ3つの歌がある
У меня ли, у молодца,	若者のこの私には
Три великие заботы!	三つの大きな気がかりがある
Как уж первая забота—	最初の気がかりは
Рано молодца женили;	早く若者のこの私が結婚させられたこと
А вторая-то забота—	二番目の気がかりは
10 Ворон конь мой притомился;	私の黒馬が疲れ果ててしまったこと
Как уж третья-то забота—	三番目の気がかりはといえば—
Красну-девицу со мною	美しい娘と私が
Разлучили злые люди.	悪人どもに引き裂かれたこと
Вы копайте мне могилу	みなさん私に墓穴を掘って下さい
Во поле, поле штроком,	野原に、広い野原に。
В головах мне посадите	頭のところには植えてください
Алы цветики-цветочки,	赤い小さな花々を
А в ногах мне проведите	足下には引いてください
Чисту воду ключевую.	泉のきれいな水を
20 Пройдут мимо красны девки,	そばを美しい娘らが通れば
Так сплетут себе веночки	それで自分の花輪を編むでしょう
Пойдут мимо стары люди,	老人らがやってくれば
Так воды себе зачерпнут.	その水を汲んで飲むでしょう

訳注 (数字は行数)

- 1 Соловейко: соловейの愛称形で男性名詞。ロシア民謡によく歌われる。соловейはセルビア語 славујの対応形。ふつう соловей обыкновенный (*Luscinia luscinia*) をさす。和名ヨナキツグミ [藤巻 2008:92]。
- 4 Незаменные: = неизменные:
- 5 Молодца: 民謡では молодец の力点は必ず第一音節にある。

- 10 Ворон: = вороной。「黒毛の」。短語尾を定語として用いるのは民謡的語法。
- 12 красну-девицу: 民謡では形容詞 **красный** は恒常的に **девица** の枕詞として用いられる。
Краснуは短語尾単数女性対格形。事実上長語尾対格形の最終音節 **-ю** を省略した形なので断尾形とも言う。注(4)と同様短語尾を定語として用いたもの。ちなみに **молодец** と同様民謡では **девица** の力点は必ず第一音節にある。
- 15 Вó поле = в поле. 韻律の要求で前置詞上に力点移った。Cf.民謡「白樺は野に立てり」の冒頭: Вó поле берéза стояла。
- 16 В головах: 「頭のところに、枕元に」。
- 17 Цветики-цветочки: **цветок** から異なる接尾辞によって派生した指小名詞を結合したもの。民謡によく見られる音韻反復の手段。スラヴ・フォークロアにおける詩的手法としての語根反復については[伊東 1981]を参照のこと。カラジッチの原文では **ружа** (「薔薇」)。
- 18 В ногах: 「足下に」

『西スラヴ人の歌』第10篇。初出は『読書文庫』1835年2月号。外村史郎、金子幸彦、伊東一郎の訳がある[プーシキン 1937, 1968; 伊東 1983]。題名の「夜鶯」«**Соловей**» は原詩にはない。ロシア民衆叙情歌に頻出するこの鳥が登場するセルビア民謡をプーシキンが翻訳の対象に選んだのは偶然ではないだろう。プーシキンはカラジッチの原詩を1824年にライプツィヒで出版された第二版の民謡集から取っている。

この詩は四脚のホレイ(強弱格)で書かれているが、この韻律は『西スラヴ人の歌』の中では叙情的な短い詩行で書かれた詩に用いられている。ちなみにロシア民謡の韻律は圧倒的にホレイが多い。『西スラヴ人の歌』の中で同じ韻律で作られているものには、メリメからの翻訳の3篇がある(第7篇「**Иакимф・Маграна**ヴィッチの葬送歌」、第9編「**ボナバルト**とモンテネグロ人たち」、第16篇「**馬**」)。

ロシア民謡風の枕詞、語根反復を駆使したこの詩は翻訳というよりロシア民謡風の創作詩であり、それに惹かれたのかこの詩には**チャイコフスキー**が作曲している(作品60の4、1886年)[伊東 1983:104-107]。

プーシキンの翻訳は訳注に示したようにロシア民謡風のかかなり自由な訳だが、大きな違いが一つある。それはカラジッチの原詩第3-4行とプーシキンの訳詞7-8行との間に見られる。

Прва ми је туга на срдашцу моме,	Как уж первая забота —
Што ме ни је мајка оженила млада;	Рано молодца женили;
私の心にかかる最初の悲しみは	最初の気がかりは—

若い私を母が結婚させてくれなかったこと 時早く若者の私が結婚させられたこと

このように原文の否定文が、プーシキンの訳では否定詞がなく文意が逆になっている。この齟齬については最初プーシキンの誤訳とみなされていたが、その後プーシキンがカラジッチの民謡集からのセルビア語テキストを書き写した草稿が発見され、そこには写し間違いがないことが明らかになった。現在ではここにはプーシキン自身の晩年の個人的状況が表現されている、と考えられている[Курихара 1986]。

7. 『西スラヴ人の歌』第14篇「妹と兄弟」Сестра и братьяとそのセルビア語原詩

7a カラジッチの民謡集におけるセルビア語テキスト

この詩のもとになったセルビア語テキストは以下の通りで、『セルビア民謡集』2巻の5番の民謡である。この民謡は1818年出版の初版には見出されず、第2版以降にしか収録されていない。カラジッチが南西セルビアの出身であるミロシュ・オブレノヴィッチ公の兄弟の従者から聞き取ったものである。「神は誰の不正も見のがさない」という原題を持つ。形式的にはユナチケ・ペスメと呼ばれるセルビア叙事詩特有の韻律構造を持つ。これは4+6の音節構造を持つ10音節詩で、前句と後句の間に句またがりがあるとはならない[Jakobson 1966]。しかし内容的には民謡的プロットを持つバラードというべきである。

同型のプロットは「手無し娘」« Косоручка » の題で知られる東スラヴ民謡の前半部分に見出され、アフナーシェフの民謡集には4篇のヴァリエントが収められているが[Афанасьев 1985: 289-296 (№279-282)]、その中では280番のヴァリエントのプロットが兄の妹を嫉妬した兄の妻が「馬を逃がす→鷹を逃がす→息子を殺す」という最も顕著な似寄りを示している(279番の訳は[アフナーシェフ 1977:155-164]「手なしんぼ」にあり)。スミルノフはプーシキンが東スラヴのこのタイプの民謡をよく知っていたために同じモチーフを含むこのセルビア民謡を訳したのだろう、としている[Смирнов 1987:457]。

Бог ником дужан не остаје.

「神は誰の不正も見のがさない」

Два су бора напоредо расла,

2本の松が並んで生えていた

Међу њима танковрха јела;

その間に細い梢のエゾマツが生えていた

То не била два бора зелена,

それは2本の緑の松ではなかった

Ни међ' њима танковрха јела,

その間に生えていたのは細い梢の樅ではなかった

Већ то била два брата рођена:

それは2人の実の兄弟

Једно Павле, а друго Радуле,

一人はバヴレ、もう一人はラドゥレ

Међу њима сестрица Јелица.
 Браћа сеју врло миловала,
 Сваку су јој милост доносила,
 10 Најпослије ноже оковане,
 Оковане сребром, позлаћене.
 Кад то вид'ла млада Павловица,
 Завидила својој заовици,
 Па дозива љубу Радулову:
 «Жертвице, по Богу сестрице!
 Не знаш како биља од омразе?
 Да омразим брата и сестрицу.»
 Ал' говори љуба Радулова:
 «Ој Бога ми, моја јетрвице!
 20 Ја не знадем биља од омразе,
 А и да знам, не бих ти казала:
 И мене су браћа миловала,
 И милост ми сваку доносила.»
 Кад то зачу млада Павловица,
 Она оде коњма на ливаду,
 Те убоде вранца на ливади,
 Па говори своме господару:
 «На зло, Павле, сеју миловао,
 На горе јој милост доносио!
 30 Убола ти вранца на ливади.»
 Павле пита сестрицу Јелицу:
 «Зашто, сејо? да од Бога нађеш!»
 Сестрица се брату кунијаше:
 «Нисам, брате, живота ми мога!
 Живота ми и мога и твога!»
 То је братац сеји вјеровао.
 Кад то виђе млада Павловица,
 Она оде ноћу у градину,
 Те заклала сивога сокола,

2 人の間には妹のイェリツァ
 兄弟は妹をいたく愛していた
 何かと贈り物をしていた
 最後に短刀をあげた
 銀と金を張った短刀を
 若いパヴレの妻はそれを見て
 自分の義理の姉を羨み
 そしてラドゥレの姉を呼び出した
 「義理の私のお姉さん
 何か仲を裂くような葉草を知らないか
 兄と妹を仲違いさせるような草を」
 だがラドゥレの姉は言った
 「おお何てこと、兄さんのお嫁さん！
 私は仲を裂くような草は知りません
 もし知っていてもあなたには言わないでしょう
 私を兄さんたちはとても愛してくれて
 何かと贈り物をしてくれました」
 それを聞くと若いパヴレの妻は
 牧場の馬たちのところに出かけ
 そして黒馬を牧場で突き殺した
 そして自分の主人に言った
 「パヴレ、あなたは妹を愛して不幸を招いた
 彼女に贈り物をして災いを招いた
 彼女は牧場であなたの黒馬を突き殺した」
 パヴレは妹のイェリツァを問い質した
 「妹よ、何故こんなことを？ 神をも恐れぬのか！」
 妹は兄に誓った
 「兄さん私ではありません、私の命にかけて！
 私とあなたの命にかけて！」
 兄は妹のその言葉を信じた
 それを見て若いパヴレの妻は
 夜中に庭へと出かけた
 そして灰色の鷹を切り殺した

- 40 Па говори своме господару:
 «На зло, Павле, сеју миловао,
 На горе јој милост доносио!
 Заклала ти сивога сокола.»
 Павле пита сестрицу Јелицу:
 «Зашто, сејо? да од Бога нађеш!»
 Сестрица се брату кунјаше:
 «Нисам, брате, живота ми мога!
 Живота ми и мога и твога!»
 И то братац сеји вјеровало.
- 50 Кад то виђе млада Павловица,
 Она оде вече по вечери,
 Те украде ноже заовине,
 Њима закла чедо у колевци.
 Кад у јутру јутро освануло,
 Она трчи своме господару
 Кукајући и лице грдећи:
 «На зло, Павле, сеју миловао,
 На горе јој милост доносио!
 Заклала ти чедо у колевци;
- 60 Ако ли се мене не вјерујеш,
 Извади јој ноже од појаса.»
 Скочи Павле, кан' да се помами,
 Па он трчи на горње чардаке,
 Ал' још сестра у душечку спава,
 Под главом јој злаћени ножеви;
 Павле узе злаћене ножеве,
 Па их вади из сребних кора,
 Али ножи у крви огрезли;
 Кад то виђе Павле господару,
- 70 Трже сестру за бијелу руку:
 «Сејо моја, да те Бог убије!
 Буд ми закла коња на ливади
- そして自分の主人に言った
 「あなたは妹を愛して不幸を招いた
 妹に贈り物をして災いを招いた!
 彼女はあなたの灰色の鷹を切り殺した」
 パヴレは妹のイェリツァを問い質した
 「妹よ、何故こんなことを? 神をも恐れぬのか!」
 妹は兄に誓った
 「兄さん私ではありません、私の命にかけて!
 私とあなたの命にかけて!」
 兄は妹のその言葉も信じた
 それを見て若いパヴレの妻は
 夕食の後の晩に出かけ
 夫の妻の短刀を盗んだ
 その短刀で揺り籠の子供を殺した
 朝が明け染める頃
 パヴレの妻は自分の主人のところに駆けつけた
 嘆きながら顔を泣きはらして
 「あなたは妹を愛して不幸を招いた
 妹に贈り物をして災いを招いた!
 彼女はあなたの子を揺り籠で殺した
 もしも私の言葉が信じられないのなら
 彼女の短刀を帯から引き抜いて見なさい」
 パヴレは狂ったように飛び起き
 そして上の屋根裏部屋へと駆けて行った
 だがまだ妹は布団の中で寝ていた
 その枕元には金を張った短刀があった
 パヴレは金を張った短刀を掴んだ
 そしてそれを鞘から抜いた
 だが短刀は血に汚れていた
 それを見て主人のパヴレは
 妹の白い手をぐいと引くと言った
 「我が妹よ、神の手で死ぬがいい
 牧場でおまえは私の馬を殺し

И сокола у зеленој башчи,
 Зашт' ми закла чедо у колевци?»
 Сестрица се брату кунијаше:
 «Нисам, брате, живота ми мога!
 Живота ми и мога и твога!
 Ако ли ми не вјерујеш клетви,
 Изведи ме у поље широко,
 80 Па ме свежи коњма за репове,
 Растргни ме на четири стране.»
 Ал' то братац сеји не вјерова,
 Већ је узе за бијелу руку,
 Изведе је у поље широко,
 Привеза је коњма за репове,
 Па их одби низ поље широко.
 Ће је од ње капља крви пала,
 Онђе расте смиље и босиље;
 Ће је она сама собом пала,
 90 Онђе се је црква саградила.
 Мало време за тим постојало,
 Разбоље се млада Павловица,
 Боловала девет годин' дана,
 Кроз кости јој трава проницала,
 У трави се љуте змије легу,
 Очи пију, у траву се крију.
 Љуто тужи млада Павловица,
 Па говори своме господару:
 «Ој чуеш ли, Павле господару!
 100 Води мене заовиној цркви,
 Не би ли ме црква опростила.»
 Кад то чуо Павле господару,
 Поведи је заовиној цркви;
 Кад су били близу б'јеле цркве,
 Ал' из цркве нешто проговара:

綠の庭で鷹を殺したとしても
 一体何故私の子を揺り籠で殺したのか？」
 妹は兄に誓った
 「兄さん私の命にかけて私ではありません！
 私とあなたの命にかけて！
 もしも私の誓いが信じられぬなら
 私を広い野原に連れ出し
 私を馬の尾に繋ぎ
 私の体を四方に引き裂かせなさい」
 だがこの妹の言葉を兄は信じなかった
 すぐに兄は妹の白い手を取り
 広い野原に彼女を連れ出し
 彼女を馬の尻尾に結わえ付け
 馬たちを広い野原に放った
 彼女の血が滴ったところには
 萎れぬ花とめぼうきが生え
 彼女の体が散った場所には
 教会が建てられた
 それからしばらくたって
 若いパヴレの妻は病みついた
 9年間も病に倒れた
 彼女の骨の間から草が伸びて来た
 その草むらに獐猛な蛇たちが住みついた
 瞳をむさぼり草の中に姿を隠すのだった
 若きパヴレの妻はひどく苦しんだ
 そして自分の主人に言った
 「ねえ主人のパヴレ！
 私を義理の妹の教会に連れて言って下さい
 教会が私を許してくれるかもしれません」
 それを主人のパヴレは聞いて
 彼女を妹の教会に連れて行った
 2人が白い教会の近くに来たとき
 しかし教会の中から何か言う言葉があった

- «Не ид' амо, млада Павловице:
Црква тебе опростити не ће.»
Кад то зачу млада Павловица,
Она моли свога господара:
- 110 «Ој Бога ти, Павле господару!
Не води ме двору бијеломе,
Већ ме свежи коњма за репове,
Па ме одби низ поље широко,
Нек ме живу коњи растргају.»
То је Павле љубу послушао:
Привеза је коњма за репове,
Па је одби низ поље широко.
Ђе је од ње капља крви пала,
Онђе расте трње и коприве;
- 120 Ђе је она сама собом пала,
Језеро се онђе провалило,
По језеру вранац коњиц плива,
А за њиме злаћена колевка,
На колевци соко тица сива,
У колевци оно мушко чедо,
Под грлом му рука матерна,
А у руци теткени ножеви.
- 「ここに来てはならぬ、若いパヴレの妻よ
教会はお前を許しはしない」
これを聞くと若きパヴレの妻は
自分の主人に懇願した
「おお、お願いだからご主人のパヴレ！
私を白い館へ連れて行かず
私を馬の尾に結わえて
そして私を広い野原に放して
私を生きながら馬に引き裂かせて下さい」
その妹の言葉をパヴレは聞いた
彼女を馬の尾に結わえつけ
そして広い野原を駆けさせた
彼女の血が落ちたところに
茨とイラクサが生えた
彼女の体が散ったところには
湖ができた
その湖を黒馬が泳ぎ
その後金に揺り籠が浮かび
その揺り籠には灰色の鷹がとまり
揺り籠の中には男の子が
その喉元には母親の手が
だがその手には子の叔母の短刀が

[Караић 1976: II №5]

訳注(数字は行数)

- 2 бор「松」と јела「エゾマツ」はそれぞれ男性名詞と女性名詞で、男性と女性の象徴。
јелаは妹の名 Јелицаを音韻的に動機付けている。ちなみにロシア語の同語形 борは後述
するように、「松林」あるいは「針葉樹林一般」の意味である。
- 13 заовица < заова 「夫の姉妹」
- 15 јертвица < јертва 本来は「夫の兄弟の妻」の意味だがここでは заовицаと同じ意味で
用いられている。
- 39 сивога сокола:「灰色の鷹」。形容詞「灰色の」は「鷹」にかかるスラヴ・フォークロア
共通の枕詞で、ロシア・フォークロアとも共通の語法である。

61 извади јој ноже од појаса:セルビアでは女性は短刀を腰帯に差す。プーシキンはこの表現をロシア語訳では省略している。

注

- (1) メリメの『グズラ』とプーシキンの『西スラヴ人の歌』の比較検討、さらにはメリメとプーシキンの比較文学的検討のためには[Mérimée/Пушкин 1987]が便利である。本書には『グズラ』と『西スラヴ人の歌』の原文、メリメによるプーシキン作品の仏訳、メリメのプーシキン論、メリメのロシア人知人への書簡が収められている。なおメリメの『グズラ』に用いられたセルビア・フォークロアおよびセルビア史に関するセルビア側からの研究にはヴォイスラフ・ヨヴァノヴィッチ、ヨヴァン・スケルリッチ、トマ・マティッチらの20世紀初頭の論考がある[Ајдачић 2004:204]。民俗学的視点からは[栗原 1995:251-253]をも参照のこと。
- (2) 『西スラヴ人の歌』に収められた叙事的な12の詩篇は、10音節前後の詩行を持ち3つの強勢を持つが、強勢間のインターヴァルに置かれる弱音節の数が可動的で行末が強弱の女性韻で終る独特の韻律で書かれている。この韻律は古くからロシア韻律学のトピックとなってきた。[Томашевский 1929; Трубецкой 1987; Jakobson 1957]などを参照。
- (3) メリメは1848年以降19世紀ロシア文学のフランスにおける最初の紹介者・翻訳者のひとりとなり、「プーシキン論」を残している[メリメ 1939]。
- (4) カラジッチの生涯と業績については[栗原 1988]を参照のこと。

文献

Афанасьев, А.

1985 *Народные русские сказки*. II. Москва.

1977 アファナーシェフ『ロシア民話集—アファナーシェフ民話集』IV 米川正夫訳 現代思潮社

Ајдачић, Д.

2004 О неким мистификацијама народних песама балканских Словена у 19 веку. //Прилози проучавању фолклора балканских Словена. Београд.

Беркопец, О.

1937 Пушкинские переводы сербохорватских народных песен. //Slavia XIV-3

Бобров, С.

1964 К вопросу о подлинном стихотворном размере пушкинских «Песен западных славян» //Русская литература 1963 No. 3

江川卓

1991 『なぞ解き『カラマーズフの兄弟』』新潮社(新潮選書)

藤巻裕蔵

2008 『鳥類・哺乳類 ロシア語辞典』極東鳥類研究会

Гаспаров

1975 Русский народный стих в литературных имитациях. //International Journal of Slavic Linguistics and Poetics. 19

1984 *История русского стиха*. Москва.

Фомичев, С.

1983 «Песни западных славян» Пушкина (История создания, проблематика и композиция цикла) //Духовная культура славянских народов. Литература, фольклор, история. Сборник статей к IX

Международному съезду славистов. Ленинград.

Иванов, Вяч.

1967 Заметки по индоевропейской поэтике. // *To Honor Roman Jakobson. II. The Hague - Paris: Mouton*

伊東一郎

1977 「ロシア・フォークロアにおける類義語反復について」『ロシア語ロシア文学研究』9

1981 「言語的ブリコラージュとしてのフォークロア—ロシア・フォークロアにおける語源的文彩 (figura etymologica)—」『国立民族学博物館研究報告』6巻2号

1983 『チャイコフスキ歌曲歌詞対訳全集 第2巻』新期社

1995 『『原初年代記』の民俗語彙(2)——グースリ』『なろうど』30号

2001 「小さなぐみの木」//伊東一郎『マーシャは川を渡れない』東洋書店

Jakobson, R.

1957 *The Kernel of Comparative Slavic Literature. //Harvard Slavic Studies. 1.*

1966 *Zur vergleichende Forschung über der slavischen Zehnsilber. //R.Jakobson. Selected Writings, IV. The Hague-Paris: Mouton*

Караџић, В.

1976 *Српске народне пјесме. I-VI. Београд.*

Колмогоров, А.

1966 О метре пушкинских «Песен западных славян» // *Русская литература 1966 № 1*

Kuhać, A.

1878 *Južno-slovenske narodne popevke. Zagreb.*

Курихара, С.

1986 К проблематике «Песен западных славян» А.С. Пушкина. // *IV Советско-японский симпозиум по литературоведению. Москва.*

柴原成郎

1987 「劇詩『ルサルカ』とその周辺」//法橋和彦編『プーシキン再読』創元社

1988 「ヴーク・カラジッチ—人と業績—一生誕200年を覚えて—」『窓』65号

1995 『吸血鬼伝説』河出書房新社

メリメ, Р.

1939 「アレクサンドル・プーシキン」神西清訳『ブロスベリエ・メリメ全集』5巻 河出書房

1977 「グズラ」杉捷夫訳『メリメ全集』1巻 河出書房新社

Mérimée, P./Пушкин, А.

1987 *Мериме—Пушкин. Сборник. (На французском и русском языках). Составитель Зоя И. Киринозе. Москва.*

Миклошич, Ф.

1895 *Изобразительные средства славянского эпоса. //Труды славянской комиссии Московского археологического общества. I.*

プーシキン, А.

1926 「ウルグラーク」米川正夫訳// (「露西亜童謡集」米川正夫訳)『世界童話大系』18 世界童話大系刊行会

1937 「西部スラヴの歌;抄」外村史郎訳(「鶯」「鬼」「兄いもと」「ヤヌィン王子」「馬」)『プーシキン全集』5 改造社

1990 『プーシキン詩集 本邦初訳』草鹿外吉他訳 青磁社

1968 『プーシキン 抒情詩』(世界名詩集23)金子幸彦訳 平凡社

1972-74 『プーシキン全集』(全6巻)河出書房新社

佐藤繁好 (編)

1999 『日本のプーシキン書誌 (翻訳・紹介・研究目録)』 自費出版

Смирнов, Ю. (сост.)

1987 *Сербские народные песни и сказки из собрания Вука Стефановича Караджича*. Москва.

Štepel, M.

1899 *Puškin i hrvatska književnost // Ljetopis Jugoslavenske Akademije znanosti i umjetnosti za godinu 1898*.

種村季弘

1985 「文学的変装術」//種村季弘『アナクロニズム』河出書房新社 (河出文庫)

Томашевский, Б.

1929a О стихе «Песен западных славян»//Томашевский, Б. *О стихе*. Ленинград.

1929b Генезис «Песен западных славян»//Томашевский, Б. *О стихе*. Ленинград.

Трубецкой, Н.

1987 (1937) К вопросу о стихе «Песен западных славян» Пушкина. // Трубецкой, Н., *Избранные труды по филологии*. Москва.